

名犬の時間

コロナ禍「ことはじめ」

なにすぐ落ちこちていた日の光もまだ残っていて、オレンジ色の夕焼けが綺麗だなんて思いながら、どんな文章を書こうかと思いを巡らせた。

私の学生生活もあと2年、早いもので、また新たな1年が始まるうとしてる。昨年、コロナ禍のため多くのものが変わり、時が止まったような何も進んでいないような、そんな

不思議な1年だったのではないだろうか。この極めて特殊な状況のために、「何もできなかった」と言うこともあった。やりたいことができなかつた、と。

確かに、多くの人々が集まること、遠くの土地を行き来すること…できないことは沢山あった。約束していた旅行や再会の場は失われ、イベントは泣く泣く延期や中止に…。悲し

かった。悔しかった。ただ、それ以外、本当に何もないだろうか。

対面の壁、しかし新たな試みであるリモート〇〇により、授業やサークル活動、オンラインの企画も動いていった。私自身、仲間と協力してラジオのリモート収録を行ったことは「できない」を「できる」に変えた第一歩だと感じている。

だから「何もできなかった」と口にする前にひとつ、考えてみてほしい。どんな状況でも、生まれたものは必ずある。私たちは、確かに一歩を踏み出していたはずだから。きっと、足掻(あが)いていたはずだから。

さて、皆さんはタートルの「ことはじめ」から、何を連想するだろう。これは、先日観た演劇の題名である。文字通り「事を始める」という意味のあるこの言葉、雰囲気柔らかいのに、苦しい状況の中でも何かをしようとする

さ。もっと出会いたい」「伝えたい」そう思った瞬間、これが私のことはじめ。この誓いが穏やかな春の訪れとともに、誰かのもとへ届いているならば幸いである。



する私たちの未来を切り開いてくれるような、そんな気がしないだろうか。コロナ禍で痛感した、出会えない悔し

これから、この先の不安は数知れず。ただ、いまはそっとここに、少しの希望を置いておきたい。

社会福祉学科3年 島谷風海

長い冬が、またひとつ終わりを迎えようとしている。あんな